

自然とかがわる

## 「これがファイヤーの木じゃ」

国立大学法人 広島大学附属幼稚園（広島県東広島市） [4歳]

園に隣接して日常的に活用している森で、苦心してイガを拾い、イガから取り出した栗を、網焼きして食べた。焼き栗は、“いい匂いがする”“熱い”“剥くのが大変”“おいしい”など、子どもたちは様々な感覚を通していろいろなことを感じた。この経験が、バーベキューごっこにつながった。

### ● したいからこそ、見る、考える、見立てる

#### 【バーベキューごっこ】9月中旬

網の下に石を置いて、網の上には小枝や葉っぱを置く。A児は小枝を指さして、「これ、お肉ね」と友達に言う。一緒に遊んでいる友達も「いいよ。じゃ～これは野菜なんよ」と葉っぱをA児に見せる。

網の上にたくさんの具材が並ぶと、じっと見つめたり、時には小枝の箸で葉っぱをひっくり返したりしながら、焼けるのを待っている。

「焼けましたか～?」と保育者が聞くと、A児は「まだでーす」と大きな声で答える。少しすると出来上がったようで、小枝の箸を使ってお肉（小枝）や野菜（葉っぱ）を掴む。

そして「フ～フ～」と冷ます真似をしたり「おいしい」と友達と一緒に食べる真似をしたりして遊んでいた。



### 考察

実際に戸外で火をおこし、焼き栗を見て、食べておいしい体験をしたからこそ、その体験がA児の心の中に残って、網の上で焼くというイメージが生まれ、再現してみたいと思ったのではないかと。しかし、A児の入園当初の知識優先の姿を思うと、その頃のA児では成立しなかった遊びである。ここで行われたのは、単なる再現遊びではないと感じる。A児はこの遊びの中で、小枝や葉っぱを肉や野菜に見立てている。そして、実際には焼いていないにもかかわらず、「フ～フ～」「おいしい」などと、見立てを楽しみ、その遊びの世界にどっぷりと浸かっている。

### ● 実際に試行錯誤することで体験的に学ぶ

#### 【ファイヤーの木】2月

寒い冬には、暖をとるために日常的に焚き火をする。焚き火では、普通の枝より、マツの木やトゲトゲの木（ネズミサシ）がよく燃えた。

それを見たA児は、さっそくとトゲトゲした感じの木を探してきて、それを焚き火の中に放り投げ、いろいろな木で燃え具合を試している。“これはすぐに燃える”“これは燃えない”など、何度も小枝を見付けては火の中に入れて試していた。

最終的にトゲトゲの木を探し当て、「これがポ～っと音を出してよく燃える」と言い、「これがファイヤーの木じゃ」と命名した。

そして“ファイヤーの木”を集めては火の中に入れて、その燃える様子を興奮して見つめていた。そのようにして、何度も繰り返して、焚き火の中に“ファイヤーの木”を入れて喜んでいった。

その後も焚き火をする度に、A児は「ファイヤーの木を持ってくる!」と言って、すぐに木を探してきて、ポ～と燃えることを喜んでいった。



### 考察

保育者が教えずとも、A児は“トゲトゲしていた”という自分なりにつかんだ特徴を頼りに、自分で考えて探していた。そして、火の中に入れて燃え具合を見て、どの木が燃えるのかを何度も試していた。自分で探し当てること自体を楽しんでいたように見えた。自分で実際に経験するからこそ、その面白さを十分に感じる事ができるし、心にも残るのではないかと。その楽しい経験が、次の活動へとつながっていくのではないかと。

## ポイント

A児は森で栗拾いをして焼き栗を楽しみ、その体験を遊びに取り入れてバーベキューごっこをしました。小枝や葉っぱなどの自然物を、その特徴を生かして「見立てること」で、遊びを楽しみながら感覚・感性が研がれています。このような体験が重ねられたことは、焚き火の活動で、いろいろな木々を試して「すぐに燃える」「音を立てて燃える」など、木の特徴や燃え方の違いに気付き、行動する“自然とかがわる”力に結び付いています。「音を立ててよく燃える」発見や“ファイヤーの木”と命名した自分の発想のよさに、幼児なりに有能感を感じている様子からは、自分自身の変容を感じ、「科学する心」が育まれていることが伝わってきます。